

●村と都市結ぶ懸け橋

西米良村は「カリコボーズの休暇村・米良の庄」というユニークな村づくりを進めている。その中で今、村と都市を結ぶ懸け橋として注目を集めているのが「西米良版ワーキングホリデー」である。

同ホリデー制度は、西米良村全域で農家などが人手を必要とする時期に、村外から募集した参加者が仕事を手伝いながら、それで得た賃金で西米良に滞在し、休暇を楽しむというもの。一九九八（平成十）年スタートした。

このユニークな試みは、都市と西米良の求めるものがうまくかみ合ったことから実現した。つまり、都市サイドでは高齢化社会の到来で元気な中高年が増え、さらに価値観の変化などから若い世代にも「帰農現象」が生まれるなどの様変わりが見られ始めた。これに対し、西米良には豊かな自然と個性的な生活文化が多く継承

され、「帰農」を希望する人を季節的に受け入れる仕事もある。西米良にとっては特に交流人口が増えることで村が活性化するという大きなメリットがあった。

仕組みはこうだ。募集期間は基本的に一週間。参加者の報酬は一人一日（七時間）四千二百七十円。宿泊料（二子キャンプ場）は一日三千円。こうして一週間に四日働けば、五千八十円が手元に入る。残り三日間は米良の豊かな自然の中でゆっくり休暇を満喫してもらおう。参加者は移動の実費だけで済む。報酬で土産物などを買ってもらえば、村内も潤う。また、参加者が都市に帰って西米良の素晴らしさを宣伝してもらえば、効果は計り知れない。

これまで花、ユズ、ユズ加工の農家、会社九カ所で年間約五十人を受け入れ、二〇〇二（同十四）年三月までに北海道から沖縄まで計百八



西米良を体験する参加者。若い女性が多いのが特徴

十九人が西米良を訪れた。利用者は当初中高年を予想したが、若い女性が過半数を占めた。〇一（同十三）年には京都の女性が受け入れ農家の男性と結婚するとうれしいケースもあった。

西米良版ワーキングホリデーは時代の波にもうまく乗り、着実な成果を挙げている。それは村全体のやる気となって現れ、村づくりの機運も高まっている。

近年、西米良ブランドとして人気が高いホオズキを民芸品や装飾分野で売り出そうという動きもその一つ。ホオズキの中に豆電球を入れた「小灯」や「七夕飾り」「ホオズキツリー」などの製作が進んでいる。「生涯現役元氣村」は今、文字通り村づくりに燃えている。

寺原重次